

## 鈴木邦男先生（右派の異端者）への質問と返答

- (1) 60年代後半の学生運動を語る時に、左翼 = 全共闘というのは間違いだと思います。一部の学生はそうだったかもしれませんがマルクスに傾倒したかなりの学生が全共闘に反対し、彼等独自の学生運動を、自治会を中心として展開したと思います。いかがでしょうか？

(返答) 確かに、学生運動 = 新左翼運動  $\simeq$  全共闘運動のイメージは強いですが、質問者の言っている「マルクスに傾倒したかなりの学生が全共闘に反対し・・・」は、民青のことを指していると思います。民主青年同盟、つまり日本共産党の大衆組織の一つですね。新左翼とは激しく対立し、東大をはじめ、各校・各地で激しく内ゲバを繰り返していました。ただ、その時代をリードした存在ではなかった。全共闘が大学や社会に突き付けた、エリートとしての学生存在の是非などを自問する「自己否定の論理」などは持ちえなかった。僕は学生時代は、右翼の学生運動をやっていて（短期間でしたが右翼の学生運動の2大勢力の一つ、全国学協の委員長もつとめました）、特に僕のいた早稲田は左翼の力が強かったので、いつも殴られていましたが、その中でも、敵ながらあっぱれという人材は全共闘には確かにいました。また独自に新聞を発行したりの運動方法や行動様式は、ずいぶん学ばせてもらいました。そうは言っても、民青は全国的な組織だったし、あの宮崎学さんなんかもいたから、ある種の畏敬の念と言ったら言い過ぎですが、怖さを感じていたことは事実です。

- (2) 鈴木さんのお話は、これこそが右翼！ というイメージとかけ離れていて、とても驚きました。

ところで右翼活動の資金源は何なのですか？ よほど大きなバックがあるように見えるのですが・・・

(返答) 右翼の資金源ですか。僕が一水会を作ったときは、既成の右翼のような企業回りは絶対にやめることを決めていました。企業を回って、運動の意義を訴え、賛同してもらって協賛金を得たり、機関誌を大量に買ってもらう。当時の右翼は、それを活動の資金源にしているところが多かったように思います。そのほか、左翼の対抗勢力として育てるために、活動資金や生活費を出すという政財界の組織や人々もいました。また、右翼を騙って、上のようなシノギをするヤクザ組織もありました。しかし、今は、商法改正により、企業も金を出しません。だから右翼も、自分で仕事をして、空いた時間に運動をし

ています。なので昔に比べると、運動も少ないです。いま一水会は、木村代表のもと機関誌レコンキスタの定期購読者を一人一人増やししながら、地道に活動をしています。したがって、みんな貧乏です（苦笑）。

(3) なぜ鈴木さん以外の多くの右翼は原発推進なのでしょう？

(返答) 原発推進が、経済界や保守派のコンセンサスだからでしょうね。それに 3.11 の東日本大震災による福島原発の事故以前は、反原発は左翼の専売特許でした。だから、反左翼を以て任ずる右翼陣営は、自動的に原発推進でもあったのです。

私のほかにも、右からの反原発を唱えて運動を繰り広げている統一戦線義勇軍の針谷議長も頑張っています。また、「陛下が足を踏み入れられない土地を生み出してしまったから」という理由で原発に反対する右翼の人もいます。

(4) 右翼として過激に活動していらっしゃった頃、この人は殺したい、殺さねばならないと思ったことはありましたか？ その理由は？

(返答) ありません。考えが違っても、同じ日本人だと思っていましたから。

(5) 天皇皇后両陛下のパラオ訪問で、戦争でなくなられた“人々”というお言葉を用いられたことに心動かされました。“国民”ではなく“人々”というお言葉であったことに、ナショナリストとしての鈴木さんはどのように感じられたのでしょうか。また 30-40 年前と“今”とのお気持ちの変化のきっかけは？

(返答) 確かに両陛下は「人々」という言葉を使われたようですね。その真意は、もちろんわかりません。どのくらいの意味付与をされていたのか。原文を読んでもみれば、例えば「祖国を守るべく戦地に赴き、帰らぬ身となった人々のことが深く偲ばれます。」というふうになっていて、文脈でいえば、国民より人々のほうが自然な日本語であることがわかります。あまり過剰に反応するのではなく、両陛下の思いを素直に受け取ればいいのだと思います。

(6) 鈴木さんのお話の中で、「若い時は理解できなかったが、今は分かる」という発言が何度もありました。30-40 年前に比べ、現在は経済構造が大変複雑化しています。そのせいかも知れませんが、今の若者は、それ相応には社会構

造をつかみながらも自分の視点を持って明確に考えるということが少ないように思います。いかがでしょうか。どのように克服していけばよいでしょうか。

(返答) これまた難しい質問ですね。「今の若者は、それ相応に社会構造をつかみながらも……視点を持って」ないと書かれていますが、若者たちの目に映ずる社会構造とはどのようなものなのでしょう。そして、なぜ社会構造をつかみながらも、視点を持って考えることが少ないのか？ 宮台真司さんはどう分析しているのでしょうか。克服方法ですか……あるとすればたくさん本を読み、たくさん人の意見を聞くことでしょうか。

(7) 児玉誉志夫はロッキード事件で知ったのですが、“右翼の大物”として当時騒がれました。謎の人物のイメージがあるのですが、彼は本物の右翼だったとお考えでしょうか？ それとも、こわもてだけでも単なるフィクサーだったのでしょうか。

(返答) 「単なるフィクサーだったのか」というご質問ですが、憶測は避けたいと思います。残念ながら、私は直接、その警咳に接したことはありません。単に利権を得ようとしたのか、何かを戦略的に実現したかったのか、聞いてみたかったのですが、チャンスがありませんでした。

#### 鈴木邦男さんへの質問と返答（追加分）

(1) 現在の天皇陛下や皇太子は、「過去の戦争の歴史を真摯に学ぶこと、世界の平和が重要であること、現在の平和憲法を守ることが大切であること」などを、何度も語っています。また、現在の天皇陛下は靖国神社を参拝していません。然しながら、安倍首相およびその取り巻きの保守政治家は、靖国神社を参拝し、憲法9条を改定しようとしています。このような行為は、現在の皇族の方々のご意向に反するものと考えますが、真っ当な保守(我が国の伝統を大切にすると自認する方々は、どのように考えているのでしょうか？

(返答) 天皇陛下のこの間のご発言については、敬服しています。私の周りでは、私を茶化す冗談として「いま日本で一番リベラルなのは天皇陛下であり、2番目は鈴木邦男だ」というジョークが流布していますが、前半に関しては全く的を射ていると思います。

それに対し、安倍首相やその周囲のお友達の方々のやっていることは、本

当に危なっかしい。閣議決定による解釈改憲などは、いわば裏口入学で、国民投票という正式な入学手続きを踏む前に、憲法改正を既成事実化し、それによって反対派を諦めさせる、さらには喪失感を抱かせて無力化させる。巧妙な手口といえるでしょう。そういう意味では、安倍さんの2度目はうまい。どんな人間にも学習能力はあるのだなあと、つくづく感じます。

でも、こんなふうには安倍さんをおちよくって溜飲を下げていても、何も始まりません。結局は、小さな1票に見えても投票する、小さなことに見えても行動する、こういうことを一人一人が積み上げるしかないでしょう。

質問に立ちかえれば、私が「まっとうな保守」かどうかは大きな疑問符がつくにしても、安倍首相らのやっтерることが天皇陛下のご意思に反していることは明らかだと思います。それは天皇の政治的発言などではなく、営々と積み上げてきた日本の平和、その根底にある平和憲法への信頼と尊重ゆえのご発言だと思います。

付け加えておきますが、私自身は護憲論者ではありません。憲法を硬性憲法ととらえるのではなく、付け加えるべき新しい理念があればそれを加え、古い上着があれば脱ぎ捨てることは、国民的合意のもとで、必要だと思っています。ただしそれは、9条のことを意味しているわけではありません。9条を拙速に放棄することは避けるべきだというのが、私の立場です。

(2) 現在の天皇陛下は、何度も沖縄を訪れて悲惨な沖縄戦の犠牲者を慰霊しています。現在の多くの沖縄県民は、過去の悲惨な地上戦の体験や、先祖伝来の貴重な土地が米軍に接収され続けていることを思い起こして、「辺野古の新基地建設」に反対しています。

真っ当な保守であれば、大切な国民である沖縄の民意を尊重すべきであると考えますが、如何でしょうか？

(返答) ここでも私が「まっとうな保守」であることを前提としたご質問のようで恐縮です。なぜ、異端の保守である私がまっとうに見えるのか。質問者が左翼だからなのか(笑)。

さて、沖縄の民意が質問者の言うとおりの「辺野古の新基地建設」に反対であることは、県知事選や衆院選挙を通じて明らかになったと思います。戦後一貫して沖縄がおかれてきた立場を考えれば、最も尊重されねばならないのは沖縄の人々の意思や土地のはずです。今、私ははっきりと「戦後」と書きましたが、沖縄にとって、「戦後」の意味は、本土の「戦後」とは明らかに違います。国土の0.6%の面積に過ぎない沖縄が、日本にある米軍基地の75%を引き受けている現状は、沖縄にとってはまだ戦中が続いている。そう言って、何の誇張もありません。

本当に沖縄に海兵隊の基地がなければいけないのか. 周辺の住民の感情や、思いやり予算がなくなった時に、本当に米軍は沖縄に居続けるだろうか. もし米軍の国内存在を認めるとしても、なぜ沖縄だけなのか. そのほか、もろもろ考えることはあるにしても、その根本に沖縄の民意を尊重することは論を待たないと思います. 同時に、選挙で少数派だったとはいえかなりの実数がある人々の意見を不断に汲み上げ、尊重しつつ、問題の解決を図っていかなければならないと思います.